

投企空間としての戦後アジア：ボクシングの東洋選手権成立の過程から

乗松, 優
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494654>

出版情報：比較社会文化研究. 21, pp.65-72, 2007-03-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

投企空間としての戦後アジア：

ボクシングの東洋選手権成立の過程から

ノリ マツ スグル
乗 松 優

はじめに

テレビが日本で初めて一般放送された1950年代において、スポーツはわれわれ日本人にとって特別な魅力を持っていた。街頭テレビ¹の時代、プロ野球やプロボクシング、プロレスリング、大相撲などの中継には、1台に8千人から1万人の大群衆が詰めかけ、付近の交通は完全にストップした。整理にかり出された警官がついにその任務をあきらめ、群衆ともども街頭テレビを眺めるという光景は、戦後を象徴する風景としてあまりに有名である（日本テレビ放送網株式会社社史編纂室 1978：43-44）。とりわけボクシングは、1954年に日本テレビが「ダイナミック・グループ」の定期放送を開始したのを皮切りに、その年までに東京放送やフジテレビ、日本教育テレビ（現テレビ朝日）の各局が週間レギュラー番組を放映するようになっていた。それも午後8時あるいは9時台といったゴールデンアワーでの放映で、それらの中継はいずれも、高いときで20~30%という高視聴率を取っている（前田 2003：73-74；後藤 2000：108）。

その当時、テレビのドル箱番組でもあったボクシングは、東洋選手権を中心に高い人気を保持していた。日本人として初めて世界王者になった白井義男が、1954（昭和29）年11月26日にアルゼンチンのパスカール・ペレスに敗れた後、日本に再び世界王座が戻ったのは、1962（昭和37）年10月10日のファイティング原田-ポーン・キングピッチ戦である。この間、優に8年間の月日が必要とされたことから、日本のファンが東洋選手権に期待をよせるのは、当然の成り行きであった。

その東洋選手権が日本で戦後初めて行われたのは、フィリピンとのあいだで、日比賠償協定と対日平和条約が批准発行される4年も前（1952年10月18日）のことであった。その後、1954（昭和29）年の東洋ボクシング連盟の成立を経て、「東洋一」の称号をめぐる熱戦は、タイや韓国をも巻き込みながら、1950年代に84回、1960年代に158回も開催された。このうち、日本とフィリピンの間で繰り広げられた王座決定戦は、1950年代に44回行われ全体の過半数を占めた。一方、1960年代においては、全試合のほぼ4割にあた

る60試合が行われ、日本のボクシングを世界的なレベルにまで牽引した。

本論の目的は、欲望や期待が投射される場としてアジアを捉え、戦後いかにして東洋選手権が成立していったのか、その過程をフィリピンとの関係の中で考察することである。アジアの中でもとりわけフィリピンに注目するのは、フィリピンがアジアを代表する唯一のボクシング先進国であったばかりでなく、大戦中に最も戦禍を被った国だからである。言うなれば、フィリピンとの間で盛んに繰り広げられた東洋選手権は、スポーツの世界から日本のアジア回帰を促す一つの象徴的な「事件」であった。朝刊スポーツ芸能専門誌として50万部以上の売り上げがあった報知新聞を例にあげれば、東洋選手権における日比交流戦は1957（昭和32）年初旬までほとんどトップ記事として扱われている。

しかしながら、日比関係が断絶していた1950年代において、ボクシングによる交流は実際には極めて特殊な事例であった。1951（昭和26）年9月にサンフランシスコ講和会議で代表演説を行ったフィリピン代表のカルロス・ロムロ外務長官は、「フィリピン側が対日敵対感情を捨て去るには一世代を要する」と発言している（佐藤 1994：126；131）。現職の官僚をしてそう言わしめるほど、当時のフィリピン国民一般は戦争の痛手から立ち直れず、強い対日不信感を募らせていた。

その一方で、投降後の処遇や戦争裁判の推移から、日本社会にはある種の通念としてフィリピンの戦争被害の甚大さと「対日悪感情」が広く知れ渡っていた（中野 2005：46-47）。にもかかわらず日本国民は、日米の戦闘に巻き込まれて死亡した約100万人ものフィリピン人を忘却してしまうほど、時の経過に伴って自国の対アジア戦争責任に無関心になっていった（鶴見 1983：73-74）。これらの諸事情によって、当然のことながら、1960年代末まではフィリピンに行く日本人も、日本に来るフィリピン人も年間数千人レベルであった（大野 2001：269-271）。

このような相互不信の時代に、日比の興行師たちはなぜ両国のボクサーを多数巻き込んで、東洋選手権をやるようになったのか。あるいは、なぜそれに取り組みなければいけなかったのか。これが本論で説き明かしたい問題である。こ

ここでは、その理由を「興行師」の戦略と実践に結びつけて考えることにしたい。本論で登場するキーパーソンは、ハワイの“サッド”・サム・ノ瀬と並んで、アジアのプロボクシング市場を開拓したロッペ・サリエルと、読売・報知新聞及び、日本テレビのオーナーで、戦後のテレビ構想を企画した正力松太郎、阪急グループ創業者・宝塚歌劇団創始者である小林十三を兄に持ち、興行界のドンとして関八州の顔役達を膝下に置いた田辺宗英の三人である。

仕組まれた「東洋一」：ロッペ・サリエル

戦後、日本で初めて東洋選手権を企画したのは、フィリピン人プロモーターのロッペ・サリエルと、日本の不二拳ジムのオーナーの岡本不二であった。中でも、第二次世界大戦の記憶が生々しかった1950・60年代に、日本人・フィリピン人ボクサーの渡航・交流が実現したのは、ロッペの尽力によるものが大きかった。『ボクシング・ガゼット』を発行する傍ら東京放送（現 TBS）の人気番組「東洋チャンピオンスカウト」の解説者でもあった郡司信夫は、彼について次のように評価している。

ハワイからは、意外に早くマリノという大物の来日を見て、日本ボクシング界を世界的水準に引きあげてくれたが、戦前非常に交流のはげしかったフィリピンからは、ジョー・イーグルなどが、終始、その招聘に骨を折っていたにもかかわらず、なかなか実現を見なかったⁱⁱ。それほど、フィリピンの対日感情の悪さは徹底していた。

二十七年七月二十四日になって、ロッキー・モンタノと、ベビー・ジャクソンの二選手が、戦後最初のフィリピン選手として来征した。モンタノは、ミンダナオ島の生まれだが、日本軍が占領中にボクシングを習ったという奇しき因縁をもっていた。日本におけるマネージャーはロッペ・サリエルで、ロッペがそのうち“フラッシュ”・エロルデの義父となって日比選手の交流につくした努力は、じつに大きく、忘れざるわけにはゆかない。……この二人を皮切りとして、以後続々とフィリピン選手の来日を見るようになる（郡司1976：276-277）。

日比ボクシング交流を復活した立て役者として広く認知されているロッペではあるが、プロモーターという職業柄、裏方に徹した彼について書かれた記録はこれ以外にほとんど見あたらない。一般的に知られていることは、彼がボクシングのマッチメーカーのみならず優れた実業家であったことと、元東洋・世界王者でフィリピンの英雄と呼ばれた

故“フラッシュ”・エロルデの義父であったことだけである。そこで本節では、ロッペ・サリエルの娘であり、同時にエロルデの妻でもあった一人の女性、ラウラ・エロルデの回想を通して、失われた過去を再構築することを試みたい。

彼女は、自らエロルデのマネージャーとして、選手育成、事業、経済面とすべてを取り仕切った。日本にもなじみ深く、エロルデとの大恋愛の末、東京・四谷の聖イグナチオ教会（現上智大学）で挙式を行っている。筆者が知る限り、彼女はフィリピンのボクシング関係者の中で、当時の日比交流をよく知る人物の一人である。ラウラによれば、ロッペ・サリエルはボクシング興行に携わる前、上海でジャズ・バンドを率いており、大戦中、日本軍の捕虜であった。ラウラは言う。

私は1932年にパパに会うために香港に行きました。その後、母もやってきました。私たちはしばらくの間、香港に滞在しました。それから、父はバンドのリーダーであったため、上海に行くことになりました。彼はそこに楽団を持っていたのです。しかし、日中戦争が既に始まっていました。そこで父は、私たちにフィリピンへ戻るよう求めたのです。1938年に私は、母と兄弟と共にフィリピンに帰国しました。しかし、彼は上海に残りました。私が聞いたところによると、日本軍は米国のパスポートを持っている人々をチェックしにやってきました。そして不運なことに、彼は（捕らえられて）強制収容所に送られてしまったのです。（2005年9月19日、フィリピン・エロルデジムでのインタビューにて）

彼女のこの発言からも読み取れるように、フィリピン人は早くから、海外に職を求めて越境している。津田(2001：255)は、「フィリピンが独立した一九四六年以降は、アメリカがグアムや沖縄に軍事基地・施設などを建造するにあたって、建設労働者・技師としてまた軍属の職員としてフィリピン人が採用されていった」と述べる。『Sports Journalⁱⁱⁱ』によれば、ロッペは、このような海外進出するフィリピン人の先駆けとして、1920年代初期から上海や北京でプロの演奏活動を行っていた。多いときで、14のジャズ楽団を率いていたというのだから、彼がマネージメントにも長けていたことがうかがい知れる。そして戦後、晴れて自由の身となったロッペは、本格的にボクシングのマッチメイクをするため新たな事業に乗り出している。ここには、なぜロッペがボクシング興行に関わるようになったのか、その理由が述べられている。

1946年に、パパは彼の古い演奏仲間のもとに帰り、重機械を取り扱う別のビジネスに従事しました。ボクシングの試合がある時はいつでも、間違いなくその場にいたものです。彼は多くのフィリピン人ボクサーの潜在性を見抜いており、国際試合を持つことがどれだけエキサイティングで実りのあることか十分に承知していました。フィリピンにとって最も近い国で、多くのアクティブなボクサーを抱えているのは日本でした。そして、日本人ファイターにフィリピン人を対抗させるのはなんて魅力的なのかと考えたのです。唯一の問題は、大戦の傷跡のために日本人がフィリピンに来ることをためらったことです。

そこで、パパは自分が日本軍の戦争捕虜であったという事実にも関わらず、その障壁を破壊することを決意したのです。彼は東洋チャンピオンシップを復活させるために、東京でプロモートしました。そのはじめてのグループが、ガブリエル・“フラッシュ”・エロルデ対堀口宏、そしてラリー・バターンと秋山政司だったのです(2004年12月1日、メールでのやり取りから)。

1952(昭和27)年10月18日、蔵前国技館で開催されたこの試合は、ボクシングにおける両国の関係改善に非常に意義のある試合となったようである。白井義男と並んで戦後の日本ボクシングを引率したピストン堀口の弟で、全日本バンダム級王座を保持している堀口宏(不二)とフィリピン・バンダム級チャンピオン、“フラッシュ”・エロルデによる東洋タイトルをかけた戦いに、約1万人のファンが集まった。開催にあたって、日本ボクシング・コミッションの田辺宗英が当日、リング上から異例の声明を発表している。

国家と国家の間の親善は、儀礼的な外交よりも、国民相互の理解と友情が根本的な根底をなすもので、スポーツはこの意味で最も有効なものと思います。……なおこの試合の実現に御尽力された読売新聞社並びにフィリピンのロツベ氏、不二拳の岡本氏等にこの席から深甚の謝意を表します^{iv}。

これを受けてフィリピンのボクシング・コミッション、ヴァレリアノ・E・フゴソは後日「ボクシングで日・比兩國の友情回復を」という書簡を田辺宛に送っている。

戦争によつてとざされ失はれた日本フィリピン両国間の友情がボクシングによつて回復されることを心から喜ぶものです。……岡本不二氏とロツベ・サリエル氏によつて提供される東京での東洋選手権試合……は

極めて意義深いものです^v。

当時の関係者によると、試合そのものは東洋タイトルの名に恥じない白熱した結果となった。エロルデのストレート、フックをさけながら、前半やや有利に戦った堀口であったが、後半にエロルデの執拗な反撃を受け7回にダウン。8回も苦戦した。9回に持ち直し追撃に出るものの勝負の行方は判定に持ち込まれ、東洋バンダム級タイトルはエロルデの頭上に輝いた。終始猛烈な接近戦の打ち合いに会場に詰めかけた多くのファンが魅了された(郡司 1976: 280; 松永 1985: 73)。この後、エロルデは1971年に村上広行に負けて2度目の引退をするまで、およそ19年間、日本人ボクサーと対戦し続け、日本のボクシングを世界のレベルにまで引き上げた。

このように、日本の帝国主義に翻弄されたロツベは、戦後の冷え切った国家間関係を乗り越えて、ボクシングのみならず両国の友好親善の先駆けとなった。ただ、ここで忘れてはならないのは、ボクシングにおける東洋が、「東洋選手権」という意味づけがなされて、はじめて生まれた空間概念であったということである。東洋太平洋ボクシング連盟^{vi}によれば、この1952年に行われた選手権には、公認団体が存在していなかった。つまり、ロツベら当時の関係者は、日本とフィリピンの対抗戦に箔を付けるために、意識的に「東洋」という売り文句を持ちだしていたというのである。ここには、日本人が固執し続けた「東洋」を逆手に取ったロツベの才知がうかがい知れる。

ロツベはこの後、エロルデをはじめとして、大場政夫やセンサク・ムアンスリン(タイ)、リカルド・アレンドンド(メキシコ)などの世界タイトル奪取に貢献し、アジアのプロボクシング市場を開拓した。2005年には、その功績が認められて、世界ボクシング殿堂入りを果たしている。ロツベ・サリエルという一人の稀代なプロモーターから戦後の興行を鑑みた場合、「東洋」とはフィリピンのみならず日本、あるいはそれ以上の国々の人間の関心を引くために用いられたひとつの「ブランド」であったと言える。そして、それは多くの日本人にとって、世界へのステップを強く予感させるイメージそのものであった。

日本テレビの目論見：正力松太郎

次にボクシングが、テレビのコンテンツになった経緯を整理したい。日本で初めてテレビを開設するという導入期に、NHKと熾烈な競争を演じた日本テレビは、経営に関してある理念をもっていた。受信料収入だけを財源とするNHKに対して、正力が社長を務める日本テレビは設立当初から広告による収入を計画していた。正力は、受信機の

普及が一定の台数に達しなければ商業テレビは採算がとれないという常識に、街頭テレビをもって挑戦した（日本放送協会 1977a：389-390）。1952（昭和27）年2月16日に正力は、日本テレビの計画概要と進展の状況について次のように語っている。

一般にテレビジョンの仕事は採算がとれないというのが通説であります。……初めは受信機も少く聴取者も少いから広告料も少くて経営が困難であるといはれますが、これは現在のラジオのように、テレビジョンの受信機を家庭におくものと考えからであります。ところが私共の計画では家庭用受信機の外に少くとも新宿、渋谷、銀座、上野等の人出の多い所に大きなスクリーンを公開して大衆に無料で観覧させるのであります（日本放送協会 1977b：216）。

正力のこの言葉通り、日本テレビは国電新橋駅前西口広場や渋谷駅ハチ公前など、都内主要ターミナルや関東一円55カ所に220台の受信機を設置した（日本放送協会 1977：390）。しかし、放送初期はテレビ専用スタジオなど番組作成の施設や条件が十分に整備されていなかったため、両局とも内容・技術において映画に太刀打ちできなかった。そこで、初期のテレビ番組は、スタジオで製作されるものよりも中継番組が中心になっていった。そのため素早い動きのあるスポーツ中継^{vii}は、開局と共に最も力の入れられたコンテンツとなってゆく（橋本 1992：218）。

その結果、このようなスポーツ放送がテレビの認知度を高め、テレビ広告の影響力の高さを証明することとなった。年度別利益をみると、NHKは1953（昭和28）年度から1956（昭和31）年度の4年間で、総額16億9千万円という巨額の損失を計上している。これはテレビが放送を開始した当初、大学卒の初任給が一万円ほどだったのに対して、受信機の値段が国産17インチテーブル型でも23万円もしたことを考えると当然の結果であった（藤平 1999：31）。にもかかわらず日本テレビは、開局からわずか7か月目で毎月400万円の減価償却費を計上している。そして、1954（昭和29）年度1300万円、1955（昭和30）年度5100万円、1956（昭和31）年度2億3000万円、1957（昭和32）年度は前期だけで3億円超と、黒字経営の上昇線を堅持している（日本テレビ放送網株式会社社史編纂室 1978：50-51）。

ここで重要なのは、日本テレビはいかにしてキラー・コンテンツとしてのスポーツ放送を独占的に獲得していったのかということである。日本テレビの社史に次のようなくだりがある。

“正力テレビ構想”の第二の勝利は、野球、バスケット

ボール、ボクシング、レスリング、スケートなど、各種スポーツ施設を完備した東都唯一のスポーツ総合殿堂である（後楽園スタジアムと独占契約を結んだことであろう。そして、これら各種スポーツの優先放送権を得たことにより、当社のスポーツ放送は、他社の追隨を許さぬものとなった（日本テレビ放送網株式会社社史編纂室 1978：46）。

開局準備に追われる中で、「後楽園における催し物のすべてをNTVの優先放送に提供する」という田辺の自発的申し出は長期間、日本テレビの揺るぎない地盤を固めることを可能にした。この背景には、後楽園球場の建設に際して、正力が田辺らと共に、大株主の一人として名を連ねることに起因する（佐野 2000：409）。さらに、巨人のフランチャイズ球場でなかったにもかかわらず、正力の一声によって後楽園球場は巨人の第一ホームグラウンドとなった。これ以降、後楽園スタジアムは専ら、読売新聞・日本テレビの販路拡大のために重要な役割を演じることになる。

勤皇主義の再生：田辺宗英

後楽園スタジアムの社長でもあり、正力の盟友でもあった田辺は、大正時代に渡辺勇次郎によってアメリカから初めて日本に持ち込まれたボクシングを今日の姿にまで普及発達せしめ、商業化を推し進めた最大の功労者であった。大正15年7月には、新橋の土橋に「帝国拳闘協会拳道社」を開設。その後、田辺宅内への道場建設を経て、四谷南寿町に剣道場を併設した新たな道場を建設し、佐藤東洋や木村久、平川末男、鈴木幸太郎など、戦前における日本のプロボクシングの黎明期を支えた名選手を育て上げた（株式会社後楽園スタジアム社史編纂委員会 1963：225）。

また、日本人にとって初挑戦となる白井義男の世界選手権が行われた際、それを機に設立された日本ボクシングコミッションの初代コミッショナーにも就任している^{viii}。さらに1954（昭和29）年5月24日には、フィリピンのコミッショナーであるマヌエル・ニエトと共に、「日比の両コミッショナーは東洋諸地域の参加を求めて東洋ボクシング連盟を作り、世界ボクシング連盟に加盟する」という覚書を発表^{ix}。同年10月27日に、日本、フィリピン、タイの三カ国の間で「ボクシングを通じて加盟国相互の親善と協力の確立」を目的のひとつに謳った東洋ボクシング連盟（OBF）を結成し、三年目に輪番のコミッショナーに就任した^x。

以上が、ボクシングを通じたアジアの国際親善について、一般に語られる田辺の貢献である。しかし、彼を生涯、ボクシングにこだわらせた理由が尊皇の精神にあったことは、今日あまり知られていない。田辺の死後、遺族によつ

て著された『人間田辺宗英』によれば、彼は戦前に、玄洋社の中心人物で、アジア主義・国家主義の立場から運動を行った頭山滿に私淑した。また、中国革命時に孫文を援助した内田良平や、黒龍会の主幹となった宮崎滔天らと知り合い、勤皇報国の思想を強めた（田辺宗英伝刊行委員会 1969：77）。後に、田辺は頭山の依頼で、内田や孫文らと共にフィリピン独立運動のエミリオ・アギナルドを支援した末永節を世話している。当時の金で毎月300円を欠かさずに届けていたというから、田辺が末永にどれほど心酔していたのか、その程をうかがい知ることができる。田辺は戦前に自らが刊行した『報国新報』の中で、「大御親の陛下を中心に國民の兄弟は一億一心になって忠義と孝行をする^{vi}」ことを説き、アジアを搾取する欧米列強の帝国主義打破に燃えた。

しかし敗戦は、田辺が期待した「天皇（日本）を家長としたアジアの秩序形成プロジェクト」をうち砕いた。戦前に激しい政治活動を行った田辺は、占領軍によって公職追放を受けている。彼にとってボクシングとは、日本民族だけが持っているときれた輝かしい伝統、すなわち「国体」の精神を護持し続けていく手段のひとつであった。『拳闘』1931（昭和6）年6月号には、次のような彼の言葉が残っている。

吾人の“拳闘”をもって、単なる格闘乱舞の技と為す勿れ。7,000万の國民に、真剣なる拳闘精神を鼓吹し、剛健なる氣象と鉄石の体軀を附与するにおいては、まさにこれ、興国済民の大事業にあらずや。眼を挙げて見よ。迷乱、險悪なる世相は真に悲しむべきではないか。拳闘精神無くして誰かよくこの難局を打破し得るものぞ。敢えて拳闘報国を高鳴する所以である^{vii}。

この文章から読みとれるのは、彼が日中戦争の開始された1931年を混沌とした時代ととらえ、（既にこの時点で）その時代を生き抜いていく手段をボクシングに求めていたということである。すなわち彼は、敢闘精神を売りにしたボクシングを通して、国家に殉ずる若者の育成を目指したと言えよう。異母兄弟小林十三の下で、黒子として政治・経済界に関わった田辺が、いち早くコミッショナーとして日本のボクシング界を精力的に取り仕切っていく背景には、このような理念が隠されていた。

それでは田辺にとって、自らがイニシアティブをとって設立にこぎ着けた東洋選手権連盟にはどんな意味があったのだろうか。この点に関しては現在のところ、残念ながら、スポーツの裏方に徹した田辺の意志を知る資料は存在していない。しかしながら、戦後田辺が勤皇主義をいかに持続させようとしたのかということと、スポーツをどのような

ものとしてとらえていたかについて読み解くことで、「日本ボクシング育ての親」と呼ばれた田辺が、東洋選手権に何を託そうとしていたのかを推し測ることができる。

第一の問いについて結論から述べれば、田辺は戦後も勤皇家としての人生を貫き通したと言える。終戦後まだ日が浅かった1950（昭和25）年の夏には、巣鴨に拘置されていた戦犯の全員を後樂園の野球見物に招待して、その心労をねぎらっている。また、東洋ボクシング連盟を結成した1954（昭和29）年には、無名時代の丹波哲郎を主役に迎えて、終戦に際して潔く自決した陸軍将校の殉国精神を尊ぶ映画、『日本敗れず』の監修も手がけた（田辺宗英伝刊行委員会 1969：167；231）。しかしながら、そのスタンスは戦前と微妙に異なっている。GHQによる日本占領期、田辺は後樂園を接収し続ける米軍に対して次のように語ったとされる。

敗戦に傷ついた國民の心の傷をいやし、再建への氣力を鼓舞するために、最も必要なものは娯楽であり、スポーツである。大衆は、心の糧に飢えている。その傷ついた心に希望の灯をともすことが、ひいては占領軍の真意にそうゆえんではないのか（田辺宗英伝刊行委員会 1969：153）。

戦後田辺は、政治から文化、とりわけスポーツに勤皇主義を推し進める舞台を求めた。これが第二の問いに対する答えである。戦前・戦後と後樂園の経営に深く関わった田辺は、正力同様、大衆が何を欲しているのか、その意識の変化に敏感であった。上記の発言は、彼にとってスポーツが、敗戦やそれに続く占領によって、否定的な自己意識を持つようになった日本人に、自尊心を回復させる試みであったことを示している。前述したとおり、東洋選手権連盟は、GHQによる日本占領が終了してわずか2年後の1954年に設立された。寺沢（2002：204-206）が著した『日本人の精神構造』によると、講和・独立前後の時期、国民意識には、早期独立・片面講和を歓迎し、安保を支持する意見が圧倒的多数であったという。また、『朝日新聞』も、アメリカ政府の意向に同調し、ナショナリズムの上に立った論説を展開していた。

ボクシングを興行面から見た場合、この大衆心理は決して無視することができない。1950年代の日本には、「日本とは何か」や「新生日本はどうあるべきか」という問いかけが広く浸透していた。しかし、戦後の日本社会において、政治的な次元であからさまに、「日本的なもの＝ナショナルなもの」を唱えることは、タブー視されていた（阿部 2003：46-47）。このような状況において、田辺は、アジアのボクシング大国フィリピンを到達し・追い越すべき「重要な他

者」と議題設定することで、日本国民が戦後ずっと抱いていた劣等感や卑小感をぬぐい去る契機を作りだそうとした。換言するなら、東洋選手権連盟の設立は、国民としての一体感を取り戻すことに悪戦苦闘していた日本に、日本(人)の国際舞台復帰を示すひとつの象徴的な出来事を創出する目的があったと言える。

おわりに

以上のことから、1950年代初期の日本で東洋選手権が成立した理由を挙げることができる。これまでの議論をまとめると、ロッセにとって東洋選手権は、より多くの観客をボクシングに動員させるためのマーケティング手段であった。また、正力にとって東洋選手権とは、将来性を疑問視されていたテレビの広告市場を拡大する狙いがあった。一方、田辺にとってのそれは、傷ついた日本人の自己意識をスポーツによって、回復させようとする演出であった。これまで論じてきたように、「東洋選手権」は、全く畑の異なった三人のイベント屋の思惑が複雑に絡み合い、偶然にも「東洋」がひとつの争点とされたことで実現へとつながった。無論、そこで懸案となった「東洋」が、虚構の空間であったことは言うまでもない。

しかし、東洋選手権は、日本人にアジアと日本の関係について再考を迫る場ともなった。というのも、日本がアジア諸国の戦争被害に対して日ごとに関心を失いつつあるときに、多くの日本人がブラウン管に映し出される東洋選手権に一喜一憂し、再びフィリピンを意識する機会を持ったためである。スポーツによって市民権を与えられたテレビは、日本とフィリピンの戦後の再会を厳格で平等なルールの下、一対一で殴り合うという誰もが理解できるシンプルな形で「上演」した。バルトによれば、ボクシングは、優越性の証明に基づくジャンセンニスム(魂が救われるか否かは神によって初めから決められているとする厳格な宗派的なスポーツであるという。彼は、ボクシングの試合を、観客の目前で築かれる歴史であると捉えた(バルト 1957=1976: 6)。

バルトが指摘するように、ボクシングは勝者のみが「真実」を提供することを許される裁きの要素を持っていた。したがって、そこではもはや、アジア諸国を序列化し自らがその頂点に君臨することを画策した、帝国日本の予定調和な筋書きは通用しない。それどころか、ボクシングは未来への不確定性をその魅力の一部として含んでいるが故に、実際にリングの外では起こりえなかった幾つかの可能性をしばしば展開した。すなわち、「東洋一」を通して生み出された「アジアの中の日本」は、流動的な状況の中で他者との関係を再構築する試みであった。アジア諸国との間

で、新たな枠組み形成へ向かっていた日本にとって、一つの王座を巡って激しく攻防を繰り広げるボクシングは、まさに「東洋」を舞台に様々な意味がせめぎ合い、結びつけられる空間として機能したと結論づけられる。

参考文献

- 阿部潔、2003、『彷徨えるナショナリズム-オリエンタリズム/ジャパン/グローバリゼーション』、世界思想社。
- Barthes, Roland., 1957, "Mythologies", Paris: Les Editions du Seuil. (篠沢秀夫訳、1976、『神話作用』、現代思潮社。)
- 後藤正治、2000、『黄金の1960年代 ファイティング原田とボクシング・デイズ』、『Sports Graphic Number PLUS January 2000』、文藝春秋、108-113頁。
- 郡司信夫、1976、『改訂新版 ボクシング百年』、時事通信社。
- 橋本一夫、1992、『日本スポーツ放送史』、大修館書店。
- 藤平芳紀、1999、『視聴率の謎にせまる デジタル放送時代を迎えて』、ニュートンプレス。
- 城島充、2003、『拳の漂流』、講談社。
- 株式会社後楽園スタジアム社史編集委員会、1963、『後楽園の25年』、株式会社後楽園スタジアム。
- 前田百基、2003、『日本のチャンピオン50年』、日本スポーツ出版社。
- 松永喜久、1985、『異色外人ボクサー列伝』、『ボクシング廃墟から栄光へのドラマ』、ベースボール・マガジン社、71-75頁。
- 中野聡、2005、『フィリピンが見た戦後日本 和解と忘却』、『思想』、岩波書店、42-56頁。
- 日本放送協会(編)、1977、『放送五十年史』、日本放送協会。
- 日本放送協会(編)、1977、『放送五十年史 資料編』、日本放送出版協会。
- 日本テレビ放送網株式会社社史編集室、1978、『大衆とともに25年<沿革史>』、日本テレビ放送網株式会社。
- 大野拓司・寺田勇文編、2001、『現代フィリピンを知るための60章』、明石書店。
- 佐野真一、2000、『巨怪伝 正力松太郎と影武者達の一世紀 上巻』、文春文庫。
- 佐藤虎男、1994、『フィリピンと日本-交流五〇〇年の軌跡』、サイマル出版。
- 津田守、2001、『出稼ぎと移住-フィリピン人によるグローバリゼーション』、『現代フィリピンを知るための60章』、明石書店、255-259頁。
- 田辺宗英伝刊行委員会、1969、『人間田辺宗英』、ダイヤモンド社。
- 寺沢正晴、2004、『戦後日本のナショナリズム』、『日本人の精神構造 伝統と現在』、晃洋書房、195-227頁。
- 鶴見俊輔、1983、『戦時期日本の精神史 1931~1945年』、岩波書店。

- i 開局当初、テレビは午前11時55分から午後2時までの昼2時間、午後5時30分から9時30分までの夜4時間、放送が行われた(月曜日から土曜日の週日)。その基本枠に加えて、後楽園球場からのプロ野球や大相撲をはじめ、各種のスポーツ、劇場中継が、番組編成に取り入れている(日本テレビ放送網株式会社社史編集室 1978: 31-32; 65)。
- ii 戦時中もフィリピンに帰国せず、日本ボクシング界の復興に参与した立役者に、ジョー・イーグルとベビー・ゴステロがいる。例えば、東京で戦後初めて「朝鮮建国促進青年同盟」(後の「民団」)とボクシング興行を主催したのは、イーグルであった(城島 2003: 119)。また、ゴステロは戦後28連勝という記録を残し、日本フェザー級王座を保持した(郡司 1976: 174)。言うまでもなく、戦後のボクシング史を振り返るとき、彼らが残した足跡を軽視することはできない。しかし、郡司の指摘にもあるとおり、日本とフィリピンの間で数多くのボクサーが交流を始

めるようになるのは、東洋選手権の設立を待たねばならない。
本論はそのようなシステムの形成過程を考察するものである
ため、ロッパや正力、田辺の思惑や言動に注意を払った。

- iii 1979, "Sports Journal", January 20, Manila : ?, 10.
- iv 1952、『The Boxing』14巻12号、拳闘社、15頁。
- v 1952、『The Boxing』14巻11号、拳闘社、17頁。
- vi 東洋選手権の歴史については以下を参照のこと。<http://www.opbf.net/history.html>
- vii 日本民間放送連盟によって行われた民間放送三社に対する調査によれば、1957(昭和32)年度のスポーツ番組は、一社一日平均518分の放送時間中、全体の19.8%を占めている。これは、文芸娯楽の39.6%につぐ割合であった(日本放送協会 1977b: 627-628)。
- viii 平沢雪村、1957、『The Boxing』19巻6号、拳闘社、21頁。
- ix 1954、『The Boxing』16巻7号、拳闘社、13頁。
- x 1954、『The Boxing』16巻12号、拳闘社、18頁。
- xi 『報国新報』、報国新報社、1943年5月23日(3面)。
- xii 1931、『拳闘』?巻6号、拳闘社、1頁。

Postwar Asia as a projected place: In the process of the formation of the Boxing Oriental Championship

Suguru NORIMATSU

In the days of street television, the popularity of boxing compared favorably with the pro-wrestling of Rikidozan. In particular, the Oriental Championship gave a positive self-awareness to Japanese who were overcome by the defeat of WWII and the subsequent occupation. The Oriental Championship led to an increase in the exchange of boxers with the Philippines - in which strong anti-Japanese feeling remained from Japan's harsh occupational rule - signaling an improvement in bilateral relations long marred by WWII. The purpose of this study is to explain how such an international game was formed. The following points have been taken into consideration. The Oriental Championship was originally a copy which the talented promoter Lope Sarreal revived. It developed major content in mass media due to the involvement of Matsutaro Shoriki, who wanted to put a telecasting project across, and Munehide Tanabe, who attempted to reproduce the principle of reverence for the Emperor. Furthermore, boxing exchanges with Asian countries produced an unexpected result, arousing Japanese interest in Asia again as well as attracting more people into stadiums and on TV. In short, the Oriental Championship provided a spark for Japanese to create a perception of Asia to stand face to face with, and reconstructed the Japanese perception of Asia after the war.